慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石坂洋次郎「石中先生行状記根ツ子町の巻」論:時代の「伝説」化を衝く風俗小説
Sub Title	
Author	須山, 智裕(Suyama, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.134- 142
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0134
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

――時代の「伝説」化を衝く風俗小説 石坂洋次郎 「石中先生行状記 根ツ子町の巻」 論

須 Щ 智 裕

はじめに

によって定説化が進み、風俗小説は一九七〇年頃までに「芸 書房、一九五〇年六月)で踏襲し、戦後派と同様に丹羽らを と「職人」の二項対立図式は中村光夫が『風俗小説論』(河出 ンという片仮名言葉はほとんど使われなくなるが、「芸術家_ 評精神を欠いていると盛んに攻撃を加えた。その後、アルチザ び表した上で、彼らの小説は世相を写すにとどまっており、批 て、花田清輝ら戦後派は、丹羽文雄ら風俗派をアルチザンと呼 一職人」の側に振り分けた。これは、中村に同調した後続論文 一九四八年に交わされたアルチスト・アルチザン論争におい から締め出されたと言ってよい。

石混淆なのであり、ジャンルごと軽視されている現状は不条理 詞といっても過言ではないだろう」と、山本芳明が批判的に指 ャンルはないだろう。風俗小説は浅薄かつお手軽な小説の代名 €したのは二○一二年のことだが、そうした状況は現在でも変 っていまい。風俗小説は、他の小説ジャンルと全く同様に玉 「日本近代文学において、風俗小説ほど、軽視されているジ

と言うほかない。

たい。(4)ためな価値を有する風俗小説の一例であることを示した。(4) 一九四九年七月)「石中先生行状記」のうちの「根ツ子町の巻.描いた体裁」の連作(「あとがき」『石中先生行状記』新潮社、 に疎開して、そこで見聞した地方生活の義理人情をあれこれと かけて書き継いだ、「小説家・石中先生なる人物が郷里の津軽 (『小説新潮』一九四八年九・一〇月)を読解し、同作が芸術 そこで本稿では、石坂洋次郎が一九四八年から一九五四年に

一、「好色文学」か「芸術作品」か

俗を壊乱するもの」と認定され、 賣新聞』一九六八年五月一二日)、警視庁保安課によって「風 年一〇月号に掲載された後半の、「セックスを形どった性神を めぐって、中年の和尚と若い女との結びつきを描いた部分」が (「石坂洋次郎氏 「石中先生行状記」エロ作品として摘発」 『日 〈藤村記者「文壇事件史―戦後編〈19〉石中先生の受難」 「根ツ子町の巻」の外在的な特異性は、『小説新潮』一九四八 摘発が行われたことにある

「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。 「文学作品」が狙われた最初の事例であった。

石坂君の問題をはなれても、 ように軽々しくとりあつかわれる処にある。この点に関しては 聞 的な活動も阻害されるわけで文化の前途が憂えられる」と語 を摘発するのは納得できない、これが前例となれば作家の良心 た出版物がはん濫しているのに、それを取締らず石坂氏の作品 局には判らないのだろう、赤本やエロ雑誌の低俗な目的を持つ 協会常任理事・石川達三は「好色文学と芸術作品との見解が当 坂洋次郎氏「石中先生行状記」エロ作品として摘発」)、文芸家 次第に昔に帰つて行くような感じを受ける」と述べ いと思われるものが出回つている、(中略)警視庁のやり方は した。例えば丹羽文雄は、「私としてはあの内容程度ならかま ないと思う、世間には「金瓶梅」やなにかの訳本でなおひど この事態を受け、文学者たちはまず、談話の形で意見を表明 ・中島健蔵が「問題は風紀警察の手によつて文学作品がこの (「文芸家協会たつ 、石中先生、 果してエロか」 『日本経済新 一九四八年一〇月一七日)。つまり、 大抵の人が反対の意思を表明して 日本著作家組合書記 (前出 9

のだ。
巻」が摘発の対象とされたことの正当性を疑う声が相次いだ
(6)

くつも提出された。 たことが政治的に支配権力を刺した」と評価する(「フアシズ 月)、なかの・しげはるが「東北の一部にのこつている性器崇 要素が横溢」する「コント・ドロラティク」であると主張し スム」たる「コント・エロティク」ではなく、「笑い 拝が批判的に描かれたこと、つまり文学として取りあつかわれ ム反対・民族独立のための斗争と文学との関係」『新日本文学』 (「社会の顔 九四九年二月)など、より理論的に石坂を擁護する言表が 翌年には、 石坂洋次郎 今日出海が同作を「十八世紀のロ 市川海老蔵」『社会』一九四九年二 ココ的 エ 口 テ

それから七年ほど経って、十返肇は『わが文壇散歩』(現代それから七年ほど経って、十返肇は『わが文壇の輿論であった」と当時を振り返った上で、同作はうのが文壇の輿論であった」と当時を振り返った上で、同作は「警察力が発動された」がゆえに「実際以上に文明批評的な作「警察力が発動された」がゆえに「実際以上に文明批評的な作「警察力が発動された」がゆえに「表際以上に文明批評的な作」と述べた。

する者が皆無に近くなってしまったことは、十返の主張を裏付摘発への対抗という事情が外れてから「根ツ子町の巻」を読解れたことが有利に働いたという側面もあるだろう。時が経ち、確かに、同時代において評価を下される際、警視庁に摘発さ

八年一一月一四日)ように、

敗戦前の苛烈な言論統制が再来す

いる」と概括した

(「顔

石坂洋次郎

作家」『週刊朝日』一九四

「芸術作品」なのかを問い直す必要があろう。の結果なのではないか。同作を精読し、「好色文学」なのかに象徴される石坂の流行=〈通俗〉作家化といった大きな流れい説の地位の低下や、発表した小説が次々と映画化される状況けるかのようである。だがそれは、『風俗小説論』以後の風俗

その際に定めなければならないのは、「芸術作品」の基準でその際に定めなければならないのは、「芸術作品」と言えるかどうかを考えたい。

表された同年九月にはすでに故人となっている。

まさしく、文学研究の基本的な態度でもある。 おなみに、石坂は警視庁に出頭した際、「「文学作品を鑑賞すちなみに、石坂は警視庁に出頭した際、「「文学作品を鑑賞すちなみに、石坂は警視庁に出頭した際、「「文学作品を鑑賞す

二、根ツ子町の名コンビ

年の夏」執筆したという村井一心斎の弔詞の書き出しに「昭和いてくる「三月」の出来事である。そして、吉田倉男が「一昨「根ツ子町の巻」は、冒頭に書かれてある通り、津軽も春め

の山崎富栄と玉川上水に入水したため、「根ツ子町の巻」が発生に文化講演の依頼に訪れた吉田青年に対し、石中先生が「君共に文化講演の依頼に訪れた吉田青年に対し、石中先生が「君共、太宰治を崇拝してるんだね?」と尋ね、吉田青年が「さうは、太宰が生きている頃に交わされたものであることを確認りは、太宰が生きている頃に交わされたものであることを確認りな、太宰が生きている頃に交わされたものであることを確認りない。大宰さんの在り方はいいと思ふんです」と答えるやり取らない。大宰さんの在り方はいいと思ふんです」と答えるやり取りは、大宰さんのは、一心済老人と三月であることがら、作中の時間は一九四八年二十一年八月六日」とあることから、作中の時間は一九四八年二十一年八月六日」とあることから、作中の時間は一九四八年

年は、 宰とは対照的に、「浮いた噂一つない模範息子」であるという。 うに、卑俗な意味での性の解放に肯定的であり、「獲物を狙ふ る。そして、コンセイ様を拝む女学生達に賛意を示しているよ 宰治でもあるかのやうに、胸を反らせて深刻さうな顔」をす 酒をガブ(〜飲んでクダを捲いて帰つてい」く太宰の奔放な 装をしている。また、招待された座談会で「話を一つもせず、 民族衣装であるルパシカを着てベレー帽を被るという奇抜な服 拝している吉田青年もまた「常識に反抗しようと」、ロシアの 通する特質として、常識への反逆性を指摘している。太宰を崇 やはり津軽出身の葛西善蔵を引き合いに出しながら、 死」(『新潮』一九四八年六月)を発表した。その中で石坂は、 し、それらはポーズに過ぎないようで、実際のところの吉田青 「スタイル」に陶酔しており、それを語る時には、「自分が太 郷土を同じくする石坂は自殺の報を受け、随筆 一のごとき眼で「雪に寝転ぶ女学生達」を凝視する。しか 女性問題などでたびたび親族に負担をかけた破滅型の太 「太宰治 良く同居して」いるように、社会も「いろんな弾き合ふものが良く同居して」いるように、社会も「いろんな弾き合ふものが良く同居して」いるように、社会も「いろんな弾き合ふものが良く同居して」いるように、社会も「いろんな弾き合ふものがら借りて読むと言い、自室の本棚には「文学や哲学等の高級から借りて読むと言い、自室の本棚には「文学や哲学等の高級から借りて読むと言い、自室の本棚には「文学や哲学等の高級な本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなな本」の相談ではの「大グハグな教養」を見て取る。と、そのでは、一、一、中国の戦場で彼の予言に命を救われた経験もあるます。

また、「社会主義、手相、

天文台が、一つの家庭の中に、

仲

らである。

しか持たない自分自身をも滅却する方向に進まざるを得ないかしか持たない自分自身をも滅却する方向に進まざるを得ないかとか持たない自分自身をも滅却する方向に進まざるを得ないかとか持たない自分自身をも滅対を表して、「馬劣」な事々となれ合うこともできる人物である。石中先生の通俗小説を批判した後に、「エロ雑誌や実話雑誌」を読むことを「顔を赤くして」告白していることなどから窺えるように、吉田青年は、そうした自らの主義主張と実生活の乖離をはっきりと自覚しているが、それを埋めようとしないのは、自己防衛のためにやむを得ないで「ノルマルな教育を受けられ」ず、「チグハグな教養」というによれて常識・良識要するに吉田青年は、太宰のデカダンスに憧れて常識・良識要するに吉田青年は、太宰のデカダンスに憧れて常識・良識要するに吉田青年は、太宰のデカダンスに憧れて常識・良識をいたが表します。

事も笑い飛ばすことで、通時的/共時的矛盾に満ちた戦後社会 育んでいく。猜疑の眼を自分にも社会にも向けることなく、 どうか疑うことはなく、 | 至つて濃やか」な | 夫婦の愛情_ 人柄であり、二人は「ボツコ」と呼ばれるほどあどけない娘と 自省をしない人物である。妻の澤木ヨシ子もまた「無邪気」 られても「陽気な高笑ひで吹き飛ばしてしまふ」、「無邪気」で たに過ぎない。転向に関するそうした諸問題を吉田青年に皮肉 すめ方」などから推察されるように、おそらく看板を付け替え と揆を一にした」「ロジツクをまるで無視した強引な説教のす 様を前にした女学生達に対する「戦争中に流行した日本精神論 便乗ぶりである。ただ、「民主的」の内実は不明で、 せれば、「無邪気で率直で、むしろ微笑ましいほど」の転向 戦後は「民主的易学創始者」を自任している。石中先生に言 合の良い予言をする「東方の予言者」として活動していたが、 パーソナリティは対照的である。彼は戦争中、日本にとって都 「和尚様」が突飛な理由で交わり、夫婦となったことが正当か その吉田青年と「友情」を成立させている一心斎老人だが、 コンセイ

三、「フイクション」と「デフオルマシオン」

に適応し、幸福に生きていくことができるのである。

石中先生は、根ツ子町での講演会の当日、一心斎老人の家で石中先生は、根ツ子町での講演会の当日、一心斎老人の家で

ヤムプの名人」(二)→老夫婦の訪問→「豚はジヤムプの名人」|初出|「豚はジヤムプの名人」(一)→お婆さんの訪問→「豚はジ

(三)→眠り

→民) |初刊| 「豚はジヤムプの名人」→お婆さんの訪問→老夫婦の訪問

(中略) (中略) (中略)

まつた……。 明るい座敷の一隅で、前後不覚にグツスリ眠りこんでし

ストシーンとの対応関係が明確になっている。
字が組み替えられたことで、同様にその感覚と眠りを連ねるラる」世界から遊離する感覚と眠りに収斂するように、語りの順いくつかの風変わりな逸話が、石中先生の「ふだん住んでゐ

の様々な「説」が添加されていき、全体として「フイクショというより、ある出来事が何度も口伝えされる中で、真偽不明け加え、吉田青年自身はそれを虚妄と考えていることを暗示しけ加え、吉田青年自身はそれを虚妄と考えていることを暗示しけ加え、吉田青年自身はそれを虚妄と考えていることを暗示したいる。ただ、これらの記述は虚実を腑分けしようとしているというより、ある出来事が何度も口伝えされる中で、真偽不明をいうより、ある出来事が何度も口伝えされる中で、真偽不明をいうより、この古いの話はインチキで、オヤヂがあとで創作して流布したという計が結婚を後押ししたという結構について、るに苦し)という卦が結婚を後押ししたという結構について、

青年は弔詞に書き込んでいる。具体的には、「沢山咸」(女を娶

こ。へと接近するさまを跡付けていると捉える方が妥当だろ

マシオン(変形)であるぞ」、「このデフオルマシオンとは、宗なのが「デフオルマシオン」という語である。二尺余りのコンるのが「デフオルマシオン」という語である。二尺余りのコンるのが「デフオルマシオン」という語である。二尺余りのコンるのが「デフオルマシオン」という語である。二尺余りのコンるのが「デフオルマシオン」という語である。二尺余りのコンるのが「デフオルマシオン」と共に鍵となこのことについて考える際、「フイクション」と共に鍵とな

シオン」が施され、「フイクション」としての「文学」が生成のこの発言は、「宗教」はともかく「芸術」に関しては受け売のこの発言は、「宗教」はともかく「芸術」に関しては受け売が「雑誌で覚えた外国語」と揶揄しているように、一心斎老人教と芸術には欠くべからざる要素なのぢや」と論す。吉田青年

されるということだ。

談会「小説の面白さ」(『綜合文化』一九四八年五月)で丹羽に談会「小説の面白さ」(『綜合文化』一九四八年五月)で丹羽にに(「私は小説家である」『改造』一九四七年九月)、「デフォルマシオンといふことを言つてゐる」と自ら述べているようる。「私は近頃、あちらこちらで小説に於ける造型とか、デフォルマシオン」の主唱者は丹羽文雄で、「小説とは人生の仮構だ。マシオン」の主唱者は丹羽文雄で、「小説とは人生の仮構だ。「小説に就て」と呼ばであった。それを象徴的に示すのが、アルチスト・アルチザン論争のた。それを象徴的に示すのが、アルチスト・アルチザン論争のた。それを象徴的に示すのが、アルチスト・アルチザン論争のた。それを象徴的に示すのが、アルチスト・アルチザン論争のた。それは、同時代において広く共有されていた文学観であっこれは、同時代において広く共有されていた文学観であっ

ついて語り合う中に、以下のような一幕が見られる。

佐々木(基一――引用者注)(前略)丹羽文雄の場合ですね。

椎名(麟三――引用者注) 賛成だなア。

花田 彼はデフオルマシオンということはしきりに云つ

ているけど(笑)……

田青年の意味深長な発言によって一変する。「すぐれた読物」として気楽に享受するが、そうした気分は吉「すぐれた読物」として気楽に享受するが、そうした気分は吉人と戦後派の評価は真逆であるが、両者の文学観そのものは驚 一円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているかについて、当 300円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているかについて、当 300円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているかについて、当 300円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているかについて、当 300円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているかについて、当 300円羽が「デフオルマシオン」をなし得ているが、

四、「伝説時代」という批評

ぞの落胤だといふ説も信じられてをります。(中略)例へす。……町の一部の年寄達の間では、この僕が、八卦オヤ伝説の中で、みみずのやうにヒク/〜蠢めいてゐるので伝説の中で、みみずのやうにヒク/〜蠢めいてゐるのでで見の中で、みみずのやうにヒク/〜蠢めいてゐるのでがするが生生、伝説と云へば、わが根ツ子町の生活が全部、伝説

く、と欲しくなつて来たのである。 すると、石中先生は、一切を忘れる寝床の休息が、ムラ

心斎老人の家ですでに世界が異化されかけていた石中先生

現実の隔りがひどすぎて」、「喋つてる下から言葉が宙に浮いて には、具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の 説」という語が選択されていることに留意する必要がある。 ない状態で「ヒク~~蠢めいてゐる」ほかない。 て一笑に付すことのできない見解が与えた動揺である。 うに、時代が「フイクション」であるという奇抜な、だが決し れたことで、より一層動揺する。それは「伝説時代」とあるよ いう〈地〉が「フイクシヨン」であるならば、〈図〉に当たる 「伝説」の特徴は口伝えされていくことであり、「伝説時代_ 「デモクラシー」等が現実として定着するはずがなく、 (戦後日本) が仮構される時代という含意があろう。 もちろん、単に「フイクション」ではなく、その中でも「伝 吉田青年から「急に陰気な調子で」このように語りかけら 端は、一 終戦後はやり出した文化講演」において、一理想と その模様 時代と 実体の

い」くという石中先生の経験に表れている。

では「伝説時代」に何が起きるのかを卑近な例で示すのが、では「伝説時代」には、でたらめな言葉がかえって環境になじみ、摩擦が〈真実〉として囁かれている状況を放置する。すなわち「伝い伝説時代に住んでゐるのですから」と投げやりになり、それい伝説時代に住んでゐるのですから」と投げやりになり、それい伝説時代に住んでゐるのですから」と投げやりになり、それい伝説時代」に何が起きるのかを卑近な例で示すのが、

る。 るがしたので、 的な行動だった。だが、吉田青年の言葉は石中先生の足場を揺 ように、日常的な世界は温存されており、眠りはあくまで生理 るのとは、まるで違つた世界へ連れこまれていくやう」とある 話は、石中先生にとって他人事だったため、「ふだん住んでゐ たか。この前に一心斎老人の家で聞いたいくつかの風変わりな が小説家・石中先生に眠りによる逃避を望ませたのではなかっ 代」には「文学」の仮構性が埋没することになる。その点こそ しての「文学」を創造するのならば、現実を喪失した「伝説時 実の一面に「デフオルマシオン」を施し、「フイクシヨン」と 巻」における「文学」の規定にあるのではないか。つまり、 やうな気持」に転じる飛躍を考える手掛かりは、「根ツ子町の 重の「不気味」さを感じるだろう。それが「自分が分解される え、それが一部で信じられ確からしさが生まれているという二 人が親子であるという説そのものが「不気味」であるのに加 これを石中先生の側から見ると、眼前の外見から対照的な二 石中先生は逃避としての眠りを求めたのであ

おわりに

た。だが第二節で確認したように、一心斎老人の言動は八卦を つてゐたものである」と、戦中を現在から切り離そうとして ことを「古い記憶」とし、「あの頃は、誰も彼も、ひどく血 水が一二寸盛り上つた」といった一心斎老人の奇天烈な予言 である。石中先生は、「敵の太平洋艦隊が全滅したために海 したいのは、「伝説時代」は戦中から連続しているということ ここまでラストシーンを詳しく読解してきたが、 郷土新聞の三面記事に「デカく~と採り上げられて」いた 最後に指摘 13 迷

と接続し、結びとしたい。 宰の死というコンテクストに触れた。それを前節で論じた内容 本稿は第二節において、「根ツ子町の巻」の背後にある、 太

る。 じ」で、二人の死は「ちやうど枝から吹き払はれた落葉の中の ような際立った「型」の人物が育たないのだ。石坂は他に、 も、「彷徨」を続ける村は元来の風土を喪失しており、 とが見えてこよう。〈戦後日本〉はいまだ仮構の段階であれど いのは、前述した要因に加え、戦後改革もそれとなっているこ あつたらう」と論じている。吉田青年の「反逆」が徹底されな その意味で、太宰は、滅びる者の美しい光茫を放つ最後の星で された北方の地盤には、もうああいふ型が育たないであらう。 ンクールや映画や農地改革や男女同権等に根底から揺すぶり荒 は、 識 「太宰の場合を、恋愛とか情死とかよぶのは、凡そ白々しい感 一枚が、途中で偶然に重り合つたやうなものだ」とも述べてい 『への反逆性』 「自己虐使性」 「孤高性」など― 石坂は随筆「太宰治の死」(前出)で、「それらの特性 たしかに北方的であり津軽的なものであつた。ダンスやコ 引用

の例である。根ツ子町は、「天皇から失われた崇高性や権威を和感はない。作中でも言及されている「日本精神論」などがそ

後日本〉

具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の 戦中から継続しているからに他なるまい。「伝説時代」には、 らりくらりと通用してしまっている。それは、「伝説時代」が

〈戦後日

敗戦を跨いでもほとんど変化がないにもかかわらず、

0)

が仮構される時代という含意があると先に述べたが、〈戦

の所に〈大日本帝国〉などの語を代入しても、全く違

アメリカが代補する」という、「共同体の「現在」に意味を与

間髪を入れない交替」を挟んで、長い「彷徨」を続けているの

超越的な他者(第三者の審級)の、速やかな、ほとんど

だけとしか思われない風俗小説とは区別されるべきであり、 度が表れているこの小説は、 「好色文学」とは区別される「芸術作品」であると言えよう。 以上のように、風俗や世相の描写のうちに、作者の立場や態 傍観者として風俗や世 相を写した

ある。太宰の死後、カストリ雑誌から新聞まであらゆるメディ(ミツ 太宰治の神話もまた形成され、再編され」ていく状況で ないのは、「情死報道の衝撃とその広範な反響とに並行して、 このように太宰の本質を見ようとする石坂が直面したに違い そしておそらく巷間の会話も、虚実が混濁し、 太宰の死後、 カストリ雑誌から新聞まであらゆるメディ 筆者・話

相という〈図〉から、社会や時代という〈地〉を探り当てるの〈地〉を明かしたとも考えられよう。眼前の個別的な風俗や世化という〈図〉を受けて、石坂は帰納的に「伝説時代」というの一つである。そうした膨大な太宰語りによる太宰の「神話」者の主観も濃厚な太宰語りで溢れた。石坂の随筆ももちろんそ

注

は、風俗小説の手法の一つである。

- (『日本近代文学』二〇二三年五月)を参照されたい。 チザン〉の批評精神――『風俗小説論』を脱却するために――」 (『日本近代文学』二〇二三年五月)を参照されたい。
- (2) 山本芳明「風俗小説の可能性――湯浅克衛「でばあと」を中心
- ものである。そのため、出版年月は三刷に合わせている。(3) この「あとがき」は、二刷までの文章から改稿された三刷以降のに」(『研究年報』二〇一二年三月)一三一頁
- (4) 「文芸往来の「小説と読者」といふ座談会。出席者は丹羽、石スクラム組んでの放談振り」(無記名「天狗草紙」『文学草紙』一九スクラム組んでの放談振り」(無記名「天狗草紙」『文学草紙』一九五〇年一月)などと言及されているように、石坂門の作品が代表している」(伊藤整「現代文学の可能性 文芸時る型の作品が代表している」(伊藤整「現代文学の可能性 文芸時る型の作品が代表している」(伊藤整「現代文学の可能性 文芸時は丹羽らとともに〈アルチザン〉たる風俗派の「代表」と見なされてきた作家である。
- ジャーナル』一九六五年一二月一九日)四三頁) 尾崎秀樹「石坂洋次郎 石中先生行状記 地方俗話の笑い」(『朝日)
- ーモアがにじみ出て、その点でいく分救われている」と、「根ツ子俚謡などにみるような、ローカルな生活に即した明るくて健康なユ6) 例外的に猿取哲(大宅壮一)は、「その卑猥な表現の中に、丁度

- 日比嘉高「私たちの存在意義をどう説明し直すか」(『日本近代文た(「同時代人 石坂洋次郎」『毎日新聞』一九四八年一〇月一七日)。た(「同時代人 石坂洋次郎」『毎日新聞』一九四八年一〇月一七日)。文壇も職業的利益を守ることに忠実なだけではなく、自発的に反省太郎の「商業的効果をねらつ」たエロチシズムを批判し、「日本の太郎の「商業的効果をねらつ」たエロチシズムを批判し、「日本の大郎の巻」に対しては一定の理解を示しながらも、舟橋聖一や川口松町の巻」に対しては一定の理解を示しながらも、舟橋聖一や川口松町の巻」に対しては一定の理解を示しながらも、舟橋聖一や川口松町の巻」に対しては一定の理解を示しながらも、
- 「根ツ子町の巻」の本文は、断らない限り『石中先生行状記』(新学』二〇一五年五月) 一六三頁
- 潮社、一九四九年四月)に拠る。

8

7

- 間違いない。 「六十ぐらゐ」と推定される一心斎老人が「四十二歳」の時の出来 「六十ぐらゐ」と推定される一心斎老人が「四十二歳」の時の出来 日露戦争に従軍した経験を持ち、一九四八年に石中先生によって
- (10) 石坂による戦中から占領期にかけての継続的なイデオロギー批判(10) 石坂による戦中から占領期にかけての継続的なイデオロギー批判
- 頁 (11) 大澤真幸『不可能性の時代』(岩波書店、二○○八年四月)二六(11) 大澤真幸『不可能性の時代』(岩波書店、二○○八年四月)二六
- (12) 川崎賢子「太宰治の情死報道──プランゲ文庫資料とその周辺か(12) 川崎賢子「太宰治の情死報道──プランゲ文庫資料とその周辺か

(すやま・ともひろ)